

システム」論、世界史ラインハルトツエルナーの「相互交流システム」論がある。「社会様式」論からは、朝鮮史宮嶋博史が「小農社会」論を論じているが上部構造について日本異質論を指摘する。日本史では、幕藩体制の構造的特質論を強調した佐々木潤之介が遺稿著書では、一六世紀以降のアジア・ヨーロッパ・中東は隷農制を共通の基盤に持ち、これに結びつけられてアメリカ・アフリカが立ち上がってくると書き残している。隷農とは「小農」である。

東アジア世界論では、日本異質論を克服しなければならない。また交流の盛んさの証明だけでなく、社会の質として文明的域圏にあることを証明する必要がある。脱アジア的歴史認識の大元は、「戦前歴史学」の「日本資本主義発達史講座」である。「戦後歴史学」は、日本の前近代史を「領主制発達段階論」で論じ、それが資本主義発達史につながられた。領主制から資本主義生成、産業革命へとこの発展段階論が論じられ、同時に明治維新での独立が強調された。二つともアジアでは日本だけが達成し、他は「停滞」したとされ、その要因が追究された。日本はヨーロッパ並みというのではなく、進んでいる面は西欧並み、遅れている面はアジア並みとされた。

近世日本を東アジアに組み込むうえでの共通分母は曖昧だが、私は「政治文化」を重視する。それを軸に「東アジア法文明圏」を構想することが最も可能性が高いと考える。この政治文化は「仁政イデオロギー」であり、その中核は「民本徳治」であり、この点で東アジア諸社会は共通の土台に乗っていた。それは君主制下の治者思

想だが、儒教的諸徳目をともなって社会の全域に浸潤した。この意味での日本の「東アジア化」は、近世に最も濃厚に浸潤した。それが中華王朝、朝鮮王朝、琉球王朝などの普遍主義的な「文明化」圧力であったかぎり、反動として国学に代表される「日本化」の力が強まるのも必然であった。この意味で近世日本では、「東アジア化」が進行し、かつ「日本化」が進行した。より内容に踏み込んだ「東アジア法文明圏」論については、次の機会に譲りたい。

## コメント

宮内庁書陵部 真辺 美佐

一 はじめに 私の研究の背景

私が最初に自由民権運動に接したのは、高校生の時、オープンしたばかりの高知市立自由民権記念館を観覧した時である。同館は高知市制百周年にあたり一九九〇年にオープンしたが、安在邦夫先生はじめ諸先生・先輩方が一九七〇年代後半から展開してきた「自由民権百年運動」の影響を強く受けて開館したものであった。

この百年運動の功績は大きく二つある。一つは、一般の人々にまで研究の裾野を広げたことである。全国の市民によって地域史料を用いた研究が深められ、中央側の資料からは見えてこない、地域の人々の民権運動への関わり方が見えてくるようになった。各地域で、

住民参加の自治体史編纂が開始され、研究会や勉強会も多く発足した。安在先生を中心に一九九一年から今日まで運営されている福島自由民権大学の活動もその大きな成果の一つである。功績の二つ目は、全国集会の大会報告集や研究書、さらに『自由民権運動研究文献目録』が出版されるなど、研究が深まり便利ツールも整ったことである。私も百年運動に間接的にはあれ影響を受け、歴史学に魅せられた一人であり、こうした百年運動の大いなる遺産を受けて研究をスタートできたことはとても恵まれたことであつたといえる。

二 安在先生から学んだこと ―私の研究への取り組み―

先生は、百年運動の前後に、自由民権運動と政党研究について、大きく二つの問題を指摘された。第一に、自由党及び立憲改進黨の活動に関する基礎的研究が不足しているという点である。自由党に關してはそれまでも研究蓄積はあつたが、分析が主に結党過程・激化事件・解党過程の三点に集中し、結党後の組織化や運動方針については『自由党史』を超えるものが出ていないと指摘された。一方立憲改進黨に關しては、「財産家・学者・老成家」による非革命的な集団というイメージが先行し、実証的研究が深化されていないと指摘された。また第二点として、民権運動退潮期、すなわち自由党が解党し、立憲改進黨の総理・副総理が脱党した一八八四年以降に關する研究の必要性を指摘された。つまりそれ以後に展開された大同団結運動から初期議會までの諸政党・政派の基礎的研究の不足である。

そして先生は実際に自らそれらの問題に關する研究を進められ、第一の問題については、特に立憲改進黨について、地方の改進黨系政社の動向を研究され、都市政党という従来のイメージに疑義を呈された。その成果は『立憲改進黨の活動と思想』にまとめられている。また第二の問題については、従来、大同団結から初期議會にかけての時期は民権運動の「変質・墮落期」であるとされていたのに対し、安在先生は、大同団結運動の中で唱えられた「減租の要求」「諸自由権の要求」等は民権運動と同質のものであり、大同団結運動は「明治憲法体制形成期の自由民権運動として、初期議會の民権活動に連動する歴史的意義をもつ」と位置付けられた。先生の御指摘は初期議會及びその後の議會政党を考察していく上でも重要な意味を持つ。従来民権運動研究と、初期議會期以降の政治史研究とはともすれば別々の研究者によって没交渉に行われがちであつたが、大同団結期を結節点にして、民権運動と初期議會期の両方を視野に入れた幅広いスパンで、運動ないし政党の歴史的変化と持続との両面を検討することが可能になってくるからである。

私は先生の提起された問題のうち、後者すなわち一八八四年以降の研究の必要性という問題提起を受け継ぎ、大同団結運動の時期を対象に据え、特にそれを提起し推進した末広鉄腸の政党論を中心に研究を進めてきた。私も、大同団結運動は、民権運動の延長上に位置づけられるという点では先生の見解に同意する。しかし評価の点では多少異なる点もある。私はこの時期は、自由民権運動であいま

いにしか表現されなかった政治的理念が、議會を目前に具体化され、政策に関する議論がより深められた時期であり、民権運動との連続性だけでなく、初期議會との連続性、そしてそこに向けての政策論議の具体化にこそ着目すべきだと考える。もちろん私は、末広鉄腸という一人物に即して研究を行ったに過ぎないので、今後末広以外の部分にまで研究を広げていかにこの時期の歴史の全体像を描いていくかということが課題となってくるが、先生の指摘された自由民権運動との連続性、そして初期議會へと接続する変化の時期という部分を見据えながら、研究をさらに深めていきたいと考えている。

### 三 自由民権運動研究・政党研究の直面している課題

現在、民権運動研究や政党研究が直面している問題は、民権運動研究に対する関心が希薄化してきたという点である。その背景の第一には百年運動以来、専門家による研究が深まるにつれて次第に市民との乖離が広がってきたことである。第二は、民衆史の視点や近代を相対化する視座から民権運動が捉え直されたことにより、かつてのような「輝かしい民権運動」という歴史像がリアリティを失い、なくなり、今日に訴えるような現代的意義が失われたということである。

第一に関しては、例えば、学会レベルでの細かい議論を、そのまま市民に提示するのではなく、市民に分かるように翻訳していくことが必要であると考える。第二に関しては、単に民権運動が「優れた政治運動」だから学ぼうというのではなく、一方で現代につながる

るとともに、他方で現代を相対化することもできる歴史の一素材として、複眼的な視座から民権運動を捉えなおしていくことが必要であろう。この二つの問題は、単に民権研究だけではなく歴史学全体にも共通する問題でもある。歴史の持つ複雑な意味を、市民にも意義あるものとして認識してもらうためには、市民に分かりやすく伝えていけるかどうかという、歴史家の力量が問われているといえる。民権百年運動における研究者と市民との関係は、その後の各地域での民権研究の広がりからも分かるように、素晴らしいものであった。しかしその方法は、そのままでは現在に通用しない。百年運動に学びながら、しかしそれとは異なる方法で、再び市民と向き合い、歴史学の裾野を広げていくことを求められているのではないだろうか。

### コメント

東京大学 佐藤 宏之

菊池徹夫先生のご報告に対して、コメントをさせていただきます。今日のコメントは、主として東北考古学に見られる研究上の問題点についてです。

先生が一貫して主張なされていることは、日本の歴史における中央史観、すなわち、「北の文化」を中央への統合の歴史として描く姿勢に対する疑問にあります。これは文献資料の乏しい北方地域の歴